



特集

法勝寺電車を守る

近代化遺産

南部町に鉄道が走っていた

法勝寺電車は、大正12(1923)年に米子と南部地域(会見・西伯)を結ぶ軽便鉄道として開業し、昭和42(1967)年に惜しまれつつ廃止されるまで、約半世紀にわたって地域の交通手段として親しまれてきました。現在、西伯小学校敷地内に『デハ203電動客車』が、米子市内に『フ50号客車』が保存されています。

木製車体の電動客車

『デハ203電動客車』は、前後の上部にライト、屋根根にパンタグラフが1基附属しています。入口は前後左右の4か所にあります。内部には運転席を前後に設け、長椅子を窓際に備えて客席としています。この電動車は1922年(大正11年)製造で、本町にとっては長年生活の足として親しまれたものであり、近代交通史を理解するうえで貴重な史料であるとされています。



昭和30年頃の手間駅



1922年に製造された デハ203電動客車



デハ203号の銘板

※近代化遺産とは

近年、近代的手法によって築造された産業・交通・土木等に関わる文化財を「近代化遺産」として位置づけ、その保護と活用を図ろうとする動きが活発化しています。その背景としては、今日の急激な社会の変化の中で、これらの貴重な「近代化遺産」は急速に失われつつあるという実態があります。